

松本のお正月

「飴市」と「三九郎」

美谷島いく子

私の幼い頃には、今より雪が多かったのだろうか。お

正月は、いつも雪の中で過ごしたように思う。空は、抜けるように透き通った青空だが、凍み付いた根雪が残っていた。雪と氷に閉ざされるこの季節には、お正月から節分、道祖神祭りに至る、多くの新年をこよほを寿ぐ行事で彩られている。

その中で、商店街での「飴市」と主に農村部での「三九郎」は、若衆や大人の助けはかりるが、子ども仲間の行事として、子どもが中心となって主体的に行っていた

松本独特の行事である。

「飴市」

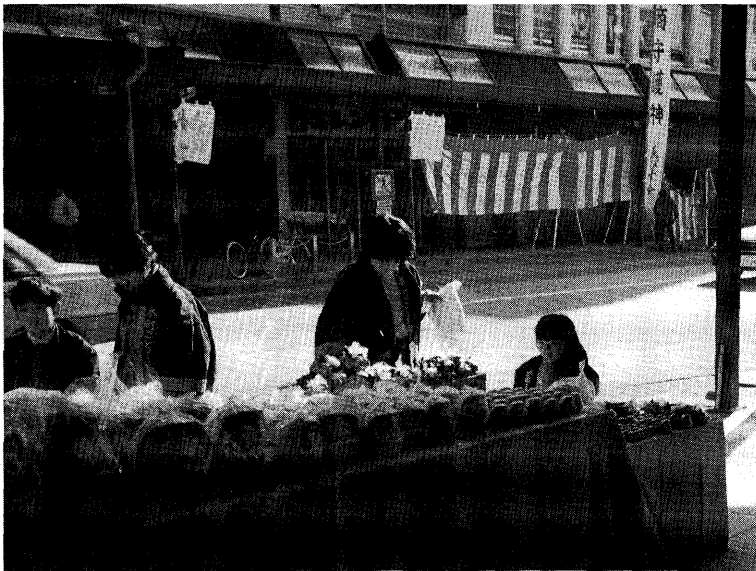
一月十日、十一日は、松本城近くの市街地は、初市である飴市（昔は塩市）で賑わう。

九日朝、中町、伊勢町、本町等の若衆が、普段は深志神社にある市神様の拜殿を迎えにゆき、各町内の道路上に仮拜殿を組み立てる。十日夜、呉服店が「市切」いちぎれ（切端や晒しを袋に入れたもの）を売り出す。

拜殿は間口二間もの立派なもので、組み立てに鷹職を頼む程だったものもある。中央の本殿には雌雄の獅子と賽銭箱、右殿は障子がたてられ御神酒を頂く所、左殿は子ども達がそこへあがって達磨や縁起物を売る所。

市神様の拜殿の中の子どもの店や、何軒か出ている子どもの露店からは、「福達磨いかがですか！ 福達磨いかがですか！ 家内安全、商売繁盛！」という元気な子どもの声がとびかう。子ども達の店では、大小の紙達磨、獅子、福飴が売られている。

朱で福飴と刷られた白い紙袋の中には、白い板飴、金太郎飴の他に、塩^{かみ}吹の形をした飴が入っている。牛による塩の運搬をしのげる塩吹の形の飴は、飴市の時にか買えず、一袋に少しだけしか入っていない。雪のような白地に、赤、緑、桃色の縦線が入った塩吹の飴を、弟と奪い合ったものである。「どうやってこんなふうに塩吹をパンパンにふくらますのだろうか」と、不思議に思いながら口に入れると、すぐに塩吹はつぶれ、さらりとした甘味が口じゅうに広がった。



▲飴市、子どもの露店（本町）。大きな達磨から小さな達磨を並べて準備中

山国信州では、塩は遠い海岸から運搬しなければ得られないので貴重品であった。人々はその時々々の支配者により、北塩、又は、南塩に頼らなければならなかった。

戦国時代に、甲斐の武田信玄の勢力下にあった松本の人々が今川氏に東海の塩（南塩）の供給を断たれ苦しんでいることを聞き、越後の敵将、上杉謙信が、日本海の塩（北塩）を送って助けた。牛の背に付けられた北塩が、糸魚川―千国―小谷を経由して、永禄十一年（一五六八年）一月十一日に松本に到着し、分配された。これが塩市の起源という。

その時、北塩を積んだ牛をつないだ牛つなぎ石が、本町から伊勢町に曲がる角に残っている。飴市の日には、牛つなぎ石には注連縄が張られ、塩が供えられる。

松本の人々は、「敵に塩を送った」謙信の義侠心をたえ、一月十一日を、塩に対する感謝の日として初市の日としたという伝説が残っている。

しかし歴史的には、中世、南塩に頼っていたのが、何かの契機で北塩に変わり、江戸、明治時代と続いてき

た。塩市は、この画期的な変化をもたらした事柄を記念する行事であったろうと言われる。武田、上杉両軍に分かれ、塩袋の乗った神輿をはさんでの綱引き「塩取り合戦」を見ながら、それは何だったのだろうかと思いを巡らす。

江戸時代には、塩市の塩売りは天神の神官がした。明治には市神様の仮拝殿で、子どもが、小さい紙袋に入れた塩をお札と一緒に売った。粘土製の金の達磨、恵比寿、大黒と共に塩が並び、「塩じゃ、塩じゃ！」という子どもの囃し声で賑わったという。

この塩は、一月十五日の朝の小豆粥の中へ縁起が良いと入れたり、春先の味噌仕込みに使うと味が変わらないという。

明治三十八年（一九〇五年）、塩が国の専売となった為、塩市は飴市に変わった。当時松本は、安曇米を原料にした飴の生産高が多かったこともその一因という。塩と飴は共に白くて神饌として用いられるが、味は正反対。飴に変わったことで、子どもにとっては一層喜ばし

いお祭りになったと言えようか。

飴市の子どもの店は、子どもに商売を身に付けさせる為、仕入れから値段決め、儲けの配分まで、全部子どもに任されていた。

例えば、七月の天神祭りの際、里山辺からお囃子の笛を教えにきてくれる小父さんへのお礼として、飴市の利益の中から子ども達自身で卵を買って届けたという。昔は男子のみが参加でき、六年生に「音頭おんど」がいて、儲けの配分を決めていたが、今は配分せず、PTAでスケートや海に連れて行く費用にするという。

飴市の子どもの店に参加するのは、松本城に近いので、火事を防ぐ為、三九郎が禁止されていた商店街の子どもが多く、門松は他の町内の子どもに持っていったらう。

「三九郎」

小正月の一月十四日、又は、十五日の夜は、正月の門松や注連飾り、おやす(1)を焼いて歳神を送り、太陽の蘇り

と、新年の豊作を祈る火祭り「三九郎」が子どもによっておこなわれる。長野県下ではほとんど焼き、道陸神焼き、おんべ焼き等の名があるが、松本平では「三九郎」と呼ぶ。

「三九郎」の名称の由来は、先学により注目されてきている。

柳田國男は、「信州のドンド焼きには、道祖神祭りの分子が著しく加味せられている。東筑摩・南安曇の二郡などは、三九郎といふのが其火祭の柱の名になっているが、是は子供の囃し言葉に三九郎・三九郎と喚びかける文句が多い為であって、或は道祖神主三九郎などと書いた紙札を貼っていたといふから、本来は此神の祭の折に作られた人形の名であったやうである。……三九郎太夫といふのは木を刻んで作った怪しげな形の棒であり、又は男女二つの人形であることもある。⁽²⁾」と述べる。

折口信夫は、「この三九郎といふ称呼は、恐らく越後の方から這入って来たものだろうと思ふ。越後に福岡といふ処がある。処が、松本附近では、前にいった三九郎

を作るのに子供の中から頭分を選出し、……それをふくま三九郎太夫と称し、まづ、これがお札を刷るので目隠しをして『福間三九郎神主』——とあつたかと思ふ——印を押す。それから、この三九郎太夫がどんど焼きの主役になって活躍するのである。……どうもこれは、以前、越後の福間から年々正月にやって来て札を配って歩いたものがあつたが、来なくなつて、村々の子供が、その代役を勤めるやうになつたのではないかと思ふ。③」と述べる。

胡桃沢勘内の、「松本の神主福間三九郎が、神に仕へる尸童である……④」とする説の他、三九郎を作るとき、三本の柱をたて、九本の横木を渡すからとする説、凶作・重税・流行病の三つの苦勞とする説があり、定説はない。

私の幼い頃の三九郎

十二月中に、父兄と五、六年生が一日がかりで東の村有林へ用材を切り出しに行く。三九郎の芯棒となる太い

松の木を切り出す。根雪になり三九郎をたてる田の地面が凍つてしまふ前に芯棒をたてる穴を掘り、円錐状に、三本の芯棒を組み立てて置く。この三九郎の中心となる柱の名称を「神棒」と呼ぶ。

松集めは、一月七日に七草粥を供えて、松おくり(松納め)された外飾りと、わら一輪、十五日に、内飾りと去年の達磨、破魔矢、縁起、お札、物作り書き等を集めて、各家々を回る。

三九郎作りは、三本の芯棒に横棒を渡し、縄でしばり付ける(大三九郎の横棒は九本、小三九郎は三本位)。次に横棒にわらをつるし、中にもわらをつめる。その回りに松や注連飾りをしばりつけ、頂上には達磨を飾る。一番大きい「大三九郎」から小さな「呼び三九郎」に至るまで、数個の三九郎が並んで作られる。それらの三九郎の間には注連飾りが張られ、でき上がり。

三九郎は小学生の男児だけで行われる。女である私は、繭玉団子を焼きにゆく時以外は弟のするのを横目で見ていただけ。又、昨年不幸のあつた家の男児も、穢れ

ているという理由で参加できない。

この祭りは、六年生の大將を中心に、あくまでも子ども達だけの力で、子ども達の自治で行われる。弟は「優等生のN君は三九郎を作っている途中で皆と喧嘩してやめて行ったのに、三九郎を燃やす時になって、仲間に入れてくれと頼みに来た」と怒って言っていた。子ども同士喧嘩をしながらも、三九郎を作り上げて燃やすこの行事は、学校とは違った人間関係を深めてゆく場ともなっていた。

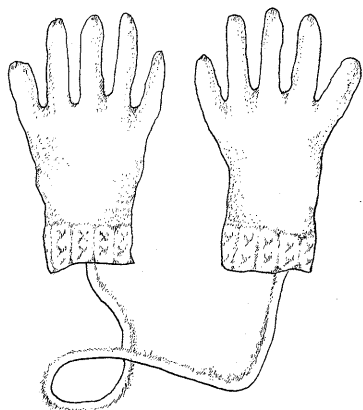
父や祖父の頃には、三九郎はもっと盛大に作り、三九郎の中を小屋にして、そこでお餅を焼いて食べて、泊り、隣村の三九郎仲間が火を付けにくるのを防いだという。

十五日の夕方、あたりが薄暗くなつて来ると、遠くから「三九郎、三九郎、早く来ない」と燃えちやうぞ。早く来ないと燃えちやうぞ。じいさん、ばあさん、孫連れて、お団子焼きに来ておくれ！」と囃す声が聞こえてくる。呼び三九郎という、一番小さい三九郎に火がつけら

れたのである。

私は、十四日の繭玉作りの時に作り、柳の枝にさしておいたお団子を持ち、凍てつくような寒さの中を、父と駆けていった。小三九郎の芯棒が燃え落ちた所へゆき、おきの中にお団子を入れて焼くとよく焼ける。

順々に近くの大きい三九郎へと火が移ってゆき、空は



真赤に燃え上がり、私の顔も火照って来る。「三九郎、三九郎、早く来ないと燃えちゃうぞ……！」という囃し声もクライマックスになり、最後に残った大三九郎に火がつけられると、竹がばちばちはね、火が天まで届いたように明るく燃え上がる。

火の粉が高く上る程豊作、大三九郎の神棒が南へ倒れば豊年、書初めが舞い上る程字が上達するという。三九郎の火で焼いたお団子を食べると虫歯にならないと、帰宅後、家族で分けて頂く。囃し歌に「じいさん、ばあさん、孫連れて……」とあるが、老人も三九郎の火に当たると若返るといふ。

私はある時、いつもと違う囃し歌を聞いた。Tという、八十歳を過ぎたと思われる髭の老人が、子どものように歌っていた。その時その囃し歌の意味はよくわからなかったが、はつきりと心に残った。しかし、その意味を誰かにたずねるのはいけないことのように思われ、ずっとそのままにしていた。今になると、それは卑猥な意味の歌だったようである。

三九郎の火祭りは道祖神祭りと結び付いている点も多く、作物の豊作を願う予祝行事であることから、物を産み出す的な言葉があってもおかしくない。この類の囃し歌は、明治、大正時代に、風俗を乱すとして制止され、消滅していった。

三九郎を燃やし終わった男児は大将の家（頭家）へ行き、皆で御馳走を食べて、カルタ、トランプ、花札等をして遊ぶ。

翌十六日には、男児は三九郎で燃え残った木を薪にして、少しずつ売って歩く。この薪を春先の味噌炊きの時用いると、味噌の味がよいという。薪を売ったお金は年齢別に分配する。

小正月の晩には上雪が降ることが多く、三九郎の燃え跡をすっぱり覆ってしまう。

地区により異なる三九郎

私は数年前、同じ市内で引越をした。新住所となった地区の三九郎に、PTA役員として娘と一緒に参加し

で、「エッ、これが三九郎」という位驚いた。それは、同じ三九郎という名前でも、私が幼い頃体験した三九郎とあまりにも違っていたから。

第一に、小学生の女兒も参加するようになったが、子ども達だけの力でするのでなく、大人の主導型である。

第二に、新興住宅が増加しつつある所の為、定まった三



▲三九郎（薄川の川原で）。

燃え上がる大三九郎と小三九郎

九郎場がなく、場所の確保が大変で二度も変わっている。第三に、三九郎の囃し歌は全く歌わない。第四に、山へ松迎えに行き、注連飾りを手作りするという人は少なく、買った小さな門松や飾りとなり、稲わらもないので三九郎も小さいのがひとつだけ。その反面、人が多いので混み合って、お団子がうまく焼けない。等々……。

この時の私は、三九郎と言えば、自分の幼い時体験した三九郎と共通なイメージであって当然と、無意識のうち思っていた。お団子さえ焼ければどんな三九郎だろうと良いと思おうとしても、何か違う感じがして、「細部にこそ神が宿り給う」とばかりに、細部にまで拘り、驚き、戸惑う。「自分の幼い時体験した三九郎こそが三九郎である」と思っていたのである。幼児期の体験の面白さ、不思議さである。

しかし冷静に考えてみると、松本市だけでも約四百箇所も三九郎があり、各々の地域によって三九郎のやり方には独自性があり、違って当然である。

娘が幼稚園の頃住んでいた官舎のある地区の三九郎は、薄川の河原に作られ、商店街なので三九郎のやり方や形も、又違っていた。

例えば、門松以外の材料について考えてみよう。私の幼い頃三九郎をした所は、稲作地だったから、稲わら文化とも言えるような、稲わらから手作りの立派な注連飾り、注連縄、おやす、宝船等が多く出され、わらも一輪

ずつもらえたので、わらを豊富に使った三九郎を作る事ができた。昭和初期の三九郎の小屋作りの際には、自分の手廻いの縄で「一人、いく尋縄」持って参加すると決まっていたという。山沿いの畑作地では、麦わら、豆がら、茅、杉であり、市街地は門松だけである。

形も円錐形の他に一本（棒）三九郎があり、数も一五と異なり、お札刷りやおんべ作りも多様である。

子ども達が作り上げ、小正月の夜、ほんの一時の間燃やされてしまう三九郎にも、大きな文化が潜んでいる。

（松本市在住 舞々同人）

〈註〉

- (1) おやす…稲わらで作った、御歳神様にお餅やご飯を供える入れ物。門松や松飾りと共に飾る。
- (2) 柳田國男『歳時習俗語彙』国書刊行会 一九七五
- (3) 折口信夫『折口信夫全集』15巻 中央公論社 一九七一
- (4) 胡桃沢勘内『福間三九郎の話』筑摩書房 一九五六